国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成26年4月1日発行　第38巻第4号通巻第439号

みんぱくは創設40周年を迎えます

月刊みんぱく

2014 4月号

特集 穴だけじゃない考古学

土器泥棒と自警団　関 雄二
大首長と遺跡保存　石村 智
発掘のエスノグラフィー　松田 陽
エジプトの考古学とアラブの春　高宮いづみ
誰にとっての「文化遺産」か？　田中英資

月刊みんぱく
平成二六年四月一日発行　第三八巻　第四号（通巻第四三九号）〈編集・発行〉国立民族学博物館
2014 4

ジャコメッティの〈終りなきパリ〉

小林 康夫（こばやし やすお）

それは、わたしの生涯で〈不動産をのぞいてだが〉いちばん高い買物だった。もう二〇年近くも前になるか、銀座のある画廊でそれと出逢った。車よりもはるかに高い値段である。だが、その夜、あとで払うからとギャラリストに言ってそのまま抱えて帰ってきた。その嬉しさをいまでも思い出す。

それとは、アルベルト・ジャコメッティのリトグラフ集『終りなきパリ』。かれのパリ風景のデッサンをリトにしたものが百枚以上も入っているのだ。セーヌ、ノートル・ダム、街路、カフェ、博物館の大きな骨格標本や、アトリエのヌードのデッサンもある。余白の多い、素早いデッサンだが、身中に病いの闇を抱えていた最晩年のジャコメッティの眼差しがとらえたパリの〈光の気配〉が忽然（こつぜん）と立ちのぼる。光と死とが透明なラップのようにぴったりと貼りついて、眼差しはその見えない境界のあいだを漂い、彷徨う。パリだ。それは、また同時に、二十歳前後のわたしの魂を魅惑し、わたしの人生を決定的な仕方でそこへと関連づけたパリ。つまり〈自由〉というインデックスが指示する場処としてのパリだ。あんなにもわたしは、その明るいグレーの〈光の気配〉のなかに自分を投げ込みたかったのだ。

憧憬という古語を使ったらいいのか、若いときのパリへのそんな願いも、さすがに人生還暦を超えると終熄（しゅうそく）してしまっている。とりわけ一昨年の晩秋、コレージュ・ド・フランスで一月の講義をしたのだが、そのときパリの街路をうろついているときに「とうとうパリに到着した」という不思議な感慨が胸の奥から湧き上がってきたのには自分でも驚いた。パリを観る眼差しがいささかジャコメッティの眼差しに似通ってきたのか。終りの感覚を通してこそ、はじめて〈終りなきもの〉が見えてくるのかもしれなかった。

そのことを確かめるために、というのは個人的な口実だが、この春、勤務する東京大学の駒場キャンパスにある美術博物館で、ジャコメッティのこの作品を中心に展覧会をオーガナイズしようと思っている。「終りなきパリ、そしてポエジー」というタイトルのもと、六〇年代のジャコメッティとパリの詩人たちの交流に焦点をあてた小さな展覧会。

ノスタルジーではない。大きく螺旋（らせん）を描いてさらに先へとのびていく時間の流れへの希望。ジャコメッティが見たあのパリの〈光〉が終りなきものであることを確かめたいのだと思う。

プロフィール
1950年東京生まれ。東京大学大学院総合文化研究科教授。現代哲学・表象文化論。十数年来、UTCP（東京大学共生のための国際哲学研究センター）の拠点リーダーとして世界の哲学者との交流対話を続けている。主な著書に『歴史のディコンストラクション』『存在のカタストロフィー』（以上、未來社）、『こころのアポリア』（羽鳥書店）、『知のオデュッセイア』（東京大学出版会）など多数。

月刊 みんぱく
4月号目次

1 エッセイ　千字文
ジャコメッティの〈終りなきパリ〉
小林 康夫

2 特集
穴だけじゃない考古学
2 土器泥棒と自警団　関 雄二
4 大首長と遺跡保存　石村 智
5 発掘のエスノグラフィー　松田 陽
7 エジプトの考古学とアラブの春　高宮 いづみ
8 誰にとっての「文化遺産」か?
——トルコにおける盗掘された文化遺産の返還問題
田中 英資

10 集めてみました世界の○○
ポット編

12 みんぱく Information

14 文化遺産おもてうら
無形文化遺産の謎——ウラはあっても「おもてなし」
飯田 卓

16 多文化をあきなう
「インカのいのち」を世界に
大橋 則久

18 味の根っこ
ファラーフェル（前編）
菅瀬 晶子

20 人間学のキーワード
文化遺産
飯田 卓

21 異聞逸聞
森の僧から学ぶこと
岡部 真由美

22 制服の世界、世界の制服
北欧型福祉国家のケアワーク
高橋 絵里香

24 次号予告・編集後記

特集

穴だけじゃない考古学

ペルー北高地、パコパンパ遺跡

発掘作業は、調査そのもの以外のところでもろもろの調整をともなう。「穴のなか」ではなく、地元行政との交渉、地域住民との関係構築、重機の手配、盗掘の問題、出土品の行方などなど、その周りではさまざまな出来事が起こる。こういった折衝からえられる人類学的知見は、どのように活かされるべきか。

土器泥棒と自警団

関雄二（せきゆうじ）
民博 研究戦略センター

がんじがらめの考古学者

考古学者と聞けば、移植ごてを握りながら地面とにらめっこをしている気むずかしそうな姿を思い起こすであろうが、海外で調査をしていると、意外にも発掘調査の期間は短い。日本では簡単に手に入るような道具類も、途上国ではなかなか見つからずに難儀したり、発掘許可の申請などに時間を取られる。考古学の場合は、調査の方法や出土遺物の登録、報告、納入について法律で細かく規定されていることが多く、研究者が自由にデータを扱えるという保証はない。しかも具体的に遺物や遺構が出土するので、金製品でもでてくると大騒ぎになるし、盗難にも気をつけなくてはならない。

パコパンパ村の農民自警団。毎晩交替で見張りをするが、その後に飲む酒が楽しいようだ

荒らされた遺跡

昨年九月中旬、ペルー北高地のパコパンパ遺跡で発掘しているときに、出土品が盗まれた。正確に言えば、発掘中の区域内で、図面や写真をとるために残してあったミニチュアの土器が一〇点ほどもち去られ、周囲にあった土器八点が踏みつぶされたのである。

作業のない日曜日の午後、守衛の目を盗んで、一一名からなるグループが発掘区に侵入した。守衛は、当時発見されたばかりで報道された石彫にいたずらをされないように見張っていたのだが、その石彫の出土地点が、高低差のある巨大なテラスの下方だったことが災いした。重要な遺構が集中する最上段部分の見張りが手薄になったのである。妙な歓声を聞きつけた守衛がかけつけると、発掘区周囲に張り巡らせた接近禁止用の縄を乗り越えて、出土品をいじる男達の姿があった。しかも退去を命ずる声を無視し、汚い言葉で言い返すなど、かなり悪質な態度を見せたという。大量かつ小型の土器であったため、守衛は盗みに気付かず、月曜日の作業再開時に考古学者が異変に気付いた。

パコパンパ遺跡の土器盗難現場。左手に黒く見えるのは、土器が持ち去られた痕。右手の壺は踏みつぶされた

ここはやはり農民自警団の出番だと、わたしは村人に助けを乞うた。ペルーの地方山間部では警察組織が整備されていないのである。その代わり、とくに牧畜が盛んな北高地では、以前から牛泥棒対策として自警団が組織されてきた。

自警団の対応のスピードは予想以上だった。窃盗グループが水道管敷設工事に雇われた村外の人びとであることや彼らの宿舎もすぐにわかった。月曜の夜、われわれ調査団のピックアップトラックに村の自警団二〇名近くと考古学者が乗り込み、容疑者らが暮らす宿舎に向かい、瞬く間に容疑者を捕まえ、自白させた。

もうひとつの裁き方

昔こそ自警団は犯罪者にリンチを加え、公的な裁きの代わりにしたようだが、最近の処罰は、もっぱら拘束と労働奉仕である。自警団は、村単独ではなく、周辺の付属村と組んで地域連合を築いている。その付属村で奉仕をさせ、一巡させるのが普通である。ところが、今回のように処罰を受ける者が一一名となるとそう簡単ではない。奉仕先の村によっては一〇名足らずの自警団しかいないところもあり、犯罪者を一度に引き受けることは不可能なのである。また奉仕活動中は人道的処置として食事を与えるのが原則であり、一一名もの食事を準備する負担は小村には大きすぎる。

最終的に自警団は処罰をあきらめ、わたしたちに公的に警察に訴えを起こすことを勧めてきた。調査終了間際の忙しい最中に、いらいらしながら警察署で書類を作成し提出したが、わたしの帰国後に、検察局の手続きが開始された。

犯罪者を簡単に釈放してしまう公的な法制度と自警団の行動とは対立することが多いのだが、今回のケースでは比較的スムーズにことが運んだ。現代社会でコストと時間の関係から法制度を補完する「法制度外の紛争解決手段」（オールタナティブ・ジャスティス）が機能したことになる。しかし、そんな法制度のこと以上にわたしの心に残ったのは、村人らが真剣に盗難事件に対応してくれたことである。まるで自分の持ち物が盗まれたかのように憤り、犯罪者らを非難する姿を見て、これまで九年間辛抱強く村人と語り、築いてきた関係は、表面的なものではなかったと確信した。

パコパンパ遺跡での現場説明会。毎年、調査の最終日には、調査団員が村人に調査成果を説明する

大首長と遺跡保存

石村 智（いしむら ともし）
奈良文化財研究所研究員

巨石によって構築されたナン・マドール遺跡の人工島群

ナンマルキとの出会い

その男は一段高いところに座り、いかめしい顔でわたしたちを見下ろしていた。外は激しい通り雨に見舞われている。わたしたちの横に座る政府の担当官の顔は明らかに緊張している。わたしはこの場に来てしまったことを後悔し始めた。これが彼――ナンマルキ（大首長）――との最初の出会いであった。

ことの始まりは、ミクロネシア連邦政府がユネスコを通じて我が国に、ナン・マドール遺跡の保存および将来のユネスコ世界遺産に向けた国際協力を要請してきたことによる。それを受けて、二〇一一年二月に文化遺産国際協力コンソーシアム（JCIC-Heritage）によるミッションが現地に派遣され、わたしはその一員として参加した。

ナン・マドール遺跡は、玄武岩の巨石などによって構築された大小九五の人工島からなる古代遺跡である。政府は長年にわたってこの遺跡の世界遺産登録を切望していたが、さまざまな課題のため実現していないという。そうした課題を把握するのが今回のミッションの目的であった。

まず政府関係者と会い、聞き取りをおこなったところ、遺跡の所有権をめぐって政府と地域住民とのあいだに意見の齟齬（そご）があることがわかった。遺跡のあるポーンペイ島は伝統的に首長たちの権威が強く、連邦政府であっても彼らの意見は無視できない。とりわけ遺跡のあるマタレニウム地区のナンマルキはもっとも権威がある大首長とされる。遺跡の保存・活用は彼の理解と協力がなければ立ち行かないだろう。

地域住民を文化遺産マネジメントに巻き込む

ナンマルキは「もし政府が遺跡をわたしたちからとりあげるなら、わたしは政府と戦争をするつもりだ」と言った。

右：ワークショップで発言する筆者と、一段高い特別席から説明を聞くナンマルキ
左：ワークショップ参加者の集合写真。一番後ろにナンマルキがいるのは、ポーンペイでは身分の高い人の後ろに立つのは失礼にあたるため

法律上、遺跡の浮かぶ沿岸部は国有地であるが、伝統的慣習では地域住民の権利がおよぶ範囲とみなされている。ナンマルキをはじめ地域住民は、遺跡が世界遺産に登録されることで、自分たちの手からとりあげられるのではないかと心配していた。また地域住民にとって「聖地」である遺跡が世界遺産になることで、外国人観光客らによって踏み荒らされるのではないかという懸念も抱いていた。

わたしたちはその後、何度もナンマルキら地域住民の代表者と話し合いの機会をもち、遺跡の保存には地域住民の協力が欠かせないことを説明した。また必ずしも世界遺産に登録されることによって遺跡の所有権が政府に奪われることはなく、むしろオーストラリアのウルルやニュージーランドのトンガリロ国立公園のように、地域住民が世界遺産のマネジメントに積極的な役割を果たしている例も多いことを説明した。

そうしてようやく同年一一月に、政府関係者やナンマルキを含む遺跡の利害関係者が一堂に会したワークショップの開催にこぎつけた。ここで、これまでのわだかまりを乗り越え、すべての利害関係者が遺跡を守っていくために協力するという合意書が交わされた。

シャカウという伝統的な飲み物を捧げる儀礼。後ろでナンマルキが様子を眺めている

最後にナンマルキは「これまでわたしたちの祖先は遺跡を神聖な場所として守ってきたが、世界遺産になることで地域に恩恵がもたらされるなら、わたしはその縄を切ろう」と語った。

発掘のエスノグラフィー

松田 陽（まつだ あきら）
イーストアングリア大学講師

再現不可能な発掘作業

東京大学ソンマ・ヴェスヴィアーナ発掘調査団は、二〇〇二年よりイタリアのソンマ・ヴェスヴィアーナの町（以下、「ソンマ」）に所在する通称「アウグストゥスの別荘」というローマ時代の遺跡の発掘をおこなっている。筆者は調査団に所属しながら、同発掘と地元コミュニティとの関係をさまざまな角度から調べてきた。

通称「アウグストゥスの別荘」遺跡

発掘は再現不可能なものである。したがって、考古学では発掘での出土物やその出土状況を細かく記録し、その後の研究に役立てる。しかし、同じく一度しか観察できないはずの発掘と地域コミュニティとのあいだの関係は、これまでの考古学研究における考察対象となってこなかった。発掘と地域社会とのかかわりはそれ自体で考査に値する。そう考えた筆者は、ソンマにて「発掘のエスノグラフィー」とでもいうべき調査をおこなった。方法論としては、文

化人類学と社会学における量的・質的調査を採用した。

発掘調査団と地域コミュニティの関係

調査をとおして、さまざまな社会事象を観察し、記録した。発掘初期のころ、調査団メンバーは町中で何度も「ニーハオ」と呼びかけられた。この呼びかけが近隣の町にある中国人コミュニティ、そしてそのコミュニティと地元のイタリア人住民との複雑な関係に部分的に起因していたことは後になってわかる。それは、発掘の社会的性格をいきなり知らしめてくれる挨拶だった。そう、遺跡発掘は閉じられた空間でおこなう研究活動とは根本的に異なり、地域の政治社会状況に否が応でも巻き込まれるのである。

調査団がソンマのもっとも重要な遺跡を発掘しにきたことが知れわたるにつれ、地元住民の態度は少しずつ変化していった。この変化の裏側には、調査団メンバーによる日々の町中での買い物、遺跡を訪れる人びとの応接、町長をはじめとした町役場の職員とのさまざまな折衝、滞在する宿舎の近隣住民とのコミュニケーションなど、ソンマ住民との多種多様の交流があった。こうした交流をとおして、調査団は徐々に地域コミュニティに溶け込んでいった。

上：通称「アウグストゥスの別荘」遺跡のオープンデー
下：通称「アウグストゥスの別荘」遺跡を訪問中のソンマ町長

発掘を利用する住民

ソンマ住民は発掘をさまざまなかたちで利用しようとした。例えば、二〇〇五年一二月には、発掘で出土したディオニュソスの彫像にあやかって名付けられたパブ「ディオニゾ・ドリンク」が町の中心部に開店した。古代ギリシャのワインの神ディオニュソスは、パブのイメージにうってつけだったのだろう。店の正面には彫像の大きなカラー写真が置かれ、パブの宣伝に一役買っていた。発掘調査団はパブの開業に一切関与しておらず、開店に際しても連絡を受けていなかった。

先に示した例からだけでも明らかなように、発掘が地域コミュニティに一方的に影響を与えるのではなく、地域コミュニティも発掘にさまざまな影響を与える。この発掘と地域社会との相互関係を丁寧に読み解くことこそが、真の意味で社会に根づいた考古学を実現するための第一歩となるのではないだろうか。

出土した彫像の写真が使われたパブの宣伝チラシ

エジプトの考古学とアラブの春

高宮（たかみや） いづみ
近畿大学教授

上：ルクソール市内での小規模なデモ
下：ルクソール市内の道路を警備する戦車

古代と現代が共存する国

前三千年ごろから古代エジプト文明が栄えた地域は、現在「エジプト・アラブ共和国」に含まれる。現在のエジプトはイスラム教徒が人口の多数を占める国で、首都カイロを訪れると、モスクや高層ビルのはるか向こうに古代のピラミッド群を望むことができる。観光収入の経済的重要性を考えても、エジプトは古代と現代が共存する世界であり、三〇年あまりのあいだ、ムバラク元大統領政権下の安定のなかで両者共存の恩恵を享受してきた。

二〇〇三年から、エジプト南部のヒエラコンポリス遺跡において発掘調査を始めた。ヒエラコンポリスは、統一王朝開闢（かいびゃく）以前の前四千年紀に有力王国の拠点集落があった場所であるが、古代の繁栄とは対照的に、現在そこには近くに小さな村があるのみののどかな農村風景が広がっている。

エジプト革命の温度差

カイロから遠く離れたこの遺跡にも、エジプト革命とアラブの春は少なからず影響を与えた。二〇一一年一月二五日、カイロとエジプト北部の都市でムバラク大統領の辞任を迫る大規模な反政府デモが始まったころ、筆者は後の革命への展開をまったく悟らずに英国ケンブリッジを出発して、その後約一か月半をヒエラコンポリスで過ごすことになった。そして、当地ではじめて異変を深刻に実感したのは、二八日のことである。朝から携帯電話、メール、インターネットがなぜかすべて繋がらなくなったのである。午後になって近隣村民から政府が通信手段を遮断したことを知らされ、事態の急変に驚いた。

そのころから、外国調査隊が次々にエジプトから引き上げていった。しかし、デモや焼き討ちがあって混乱さなかのルクソールの空港に行くよりも、現地にとどまり、状況を見ながら発掘調査を進めることを選択した。それなりの緊迫感のなかで発掘を続ける筆者等のそばを、朝夕羊の群

ヒエラコンポリス遺跡の調査地脇をとおる羊の群れ

れがのんびりとした鳴き声をあげながらとおっていて、見かけ上農村の日常に大きな変化はなかった。

発掘調査は、近隣の村人たちを雇用して手伝ってもらう。彼らの「エジプト革命」に対する反応は複雑であったと思う。社会に多少の不満はあっても根本的な変革を望むほどではなく、二月一一日にムバラク元大統領の辞任が報じられて、当惑しながら革命成功の歓喜に同調した感じであろうか。エジプト北部の都市とエジプト南部の農村とのあいだには、明らかに革命に対する温度差があった。

治安と考古学調査

しかし、エジプト革命の影響は確実かつ速やかにエジプト南部の農村にも達した。まず、各地で労働条件向上を求めるデモやストがおこなわれ、遺跡で働く村人たちの賃上げ要求も例年より厳しくなった。また、考古学的調査とも深く関連するのは、治安の悪化である。混乱に乗じたカイロ博物館における展示品の略奪は有名であるが、革命とともに警察組織が弱体化したために、地方の遺跡や遺物倉庫でも略奪や盗掘が頻繁に起こるようになった。ヒエラコンポリスでも、夜間に盗掘者が遺跡にやってきたが、幸い私設ガードマンたちが追い払った。

革命当初エジプトの救世主となったのは、政府と反政府グループとのあいだで中立を保って混乱を収めた軍隊である。間もなく公正な選挙もおこなわれて一旦は明るい喜びに満ちたエジプトであったが、その後の新しい国作りへの道のりは険しかった。一部の考古学調査は再開されたものの、現在も治安は十分に回復せず、そこから生じた観光収入の落ち込みは深刻な経済問題を引き起こしている。二〇一三年七月に再び軍隊が政治の世界に浮上した状況のなか、わたしたち外国調査隊はエジプトの平安を心から祈りながら、人びとの選択と今後の行く末を見守っていくしかないのだろう。

ヒエラコンポリス遺跡での発掘調査風景

誰にとっての「文化遺産」か？

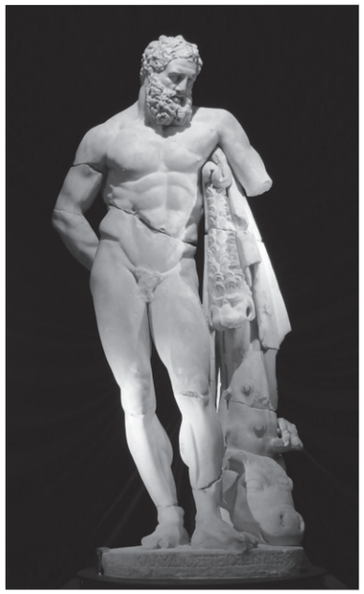
――トルコにおける盗掘された文化遺産の返還問題

田中英資（たなかえいすけ）
福岡女学院大学准教授

盗掘と古美術品市場

二〇一一年九月、ギリシャ神話の英雄ヘラクレスの上半身像がボストン美術館からトルコに返還された。これは一九六〇年代にトルコ南部アンタルヤ県のペルゲ遺跡から盗掘され国外に持ち出されたといわれている。この像が一九九〇年に一般公開された際に、一九八〇年代に発見された下半身だけの像と形状が一致することから、トルコ政府は約二〇年にわたって返還を求めていた。なお、返還された上半身は下半身とつなぎ合わされ、現在はアンタルヤ博物館で公開されている。

トルコでは遺跡の盗掘被害がよく報道される。盗掘品が国際的な古美術品市場にて高値で取引されることが、遺跡盗掘の横行する背景といわれている。トルコ政府は、国内の遺跡から出土するものはすべて国有の文化遺産とされ、盗掘による出土品の国外流出は文化遺産の「損失」として、遺跡盗掘を厳しく取り締まっている。しかし、盗掘被害の報告があとを絶たないのが現状だ。


上半身が返還され、つながったペルゲ遺跡出土のヘラクレス像

一方で、冒頭のヘラクレス像の事例のように、政府による国外に流出した盗掘品の返還の取り組みもおこなわれている。特に、そうした盗掘品が欧米の主要博物館や個人収集家の収蔵品になっていることが問題視されている。そのため、トルコ由来が疑われる古美術品を収蔵する博物館に対して、今後の企画展示に協力しないとする姿勢を見せるなど、政府は欧米諸国の博物館に対して強い態度で返還を求めている。

何が文化遺産か？

ここで注目すべきなのは、盗掘や盗掘されたものが古美術品市場に出回ることの何が問題なのかは、それを問題視する立場によって変わることだ。

盗掘され国外流出した文化遺産の返還を求めるトルコ政府の主張の根幹には、文化遺産とはそれが発見された場所にあることでその価値が正しく理解されるという考え方がある。つまり、トルコ政府にとっての文化遺産としての出土品の価値は、モノとそれが発見された場所としてのトルコとの結びつきに見い出されている。

もちろん、古美術品取引にかかわる欧米の博物館や個人収集家にとっても盗掘品の取引は許されない犯罪である。しかし、彼らのあいだには世界中の人びとが文化遺産の価値を享受すべきという意見も強い。この考えに従えば、人類の遺産としての側面を強調することで、文化遺産としての出土品はトルコで守られる必然性はないということになる。

一方、考古学的に問題なのは、盗掘によって出土品が遺跡からどのように発見されたのかがわからなくなることだ。金銭的価値が目当てなら、モノさえ見つかればそれがどのように地中に埋まっていようと関係がない。しかし、考古学者が探し求める過去の情報は、出土品が発見された状況から得られる。その意味では、考古学者にとっての文化遺産の価値は、モノそのものというより、それが発見された文脈にある。

このように、遺跡から掘り出されたモノには文化遺産としての価値が与えられるが、そこにはさまざまな立場の人びとの利害が絡み合っている。文化遺産とはその出土品それ自体なのか、発見の文脈なのか、また、誰にとっての文化遺産なのかが問われている。

上：アメリカから返還された、オルフェウスを描いたモザイク画
下：アメリカから返還されたトロイ遺跡出土の金の首飾り

盗掘者に中心部分が削り取られたゼウグマ遺跡出土のモザイク画。削り取られた部分が映写されている

集めてみました世界の

みんぱくが所蔵している世界のポットを集めてみました。
コーヒーやお茶をいれる道具も、地域ごとに形や模様が
少しずつ違っているのがわかります。

ティーポット
アイルランド
三つの足と貝がらのような模様が特徴の小さなポット。1918-38 年ごろ、当時のチェコスロバキアで作られ輸出された大量生産品のひとつと思われる。
H 8.8 x W 14 x D 17
H0121529

コーヒーポット
フランス
上部にろ過器のついたコーヒーポット。18 世紀なかばにいたるまではこまかくひいたコーヒー豆を煮出してそのまま飲んでいた。ろ過してかすをとりのぞく方法を発明したのはフランス人であるといわれる。
H 25 x W 12 x D 21
H0003434

ティーポット
アフガニスタン
釘とハンマーで細かな文様がほどこされた金属細工のポット。
H 12 x W 13 x D 19
H0000795

茶入れ容器
モンゴル
モンゴルの人びとは、牛乳と緑茶とを煮込んだスーテ・ツァイとよばれる熱い茶を好む。
H 31 x W 12
H0063909

コーヒーポット
トルコ
ひしゃく型のポットにコーヒーの粉と砂糖と水を入れて煮立てる。粉はフィルターせずにカップに注ぐ。カップの底に残ったコーヒーの粉で、コーヒー占いをすることもある。
H 16 x W 22 x D 7.7
H0001946

サモワールとティーポット
トルコ
炭を入れて湯を沸かし、蛇口からティーポットに湯を注ぐ。ポットをサモワールの最上部にのせて、お茶を保温しておくことができる。スラブ諸国、イラン、トルコで日常的に使われているが、現在は電熱式が主流である。
H 75 x W 48 x D 51
H 29 x W 23 x D 38
H0001893、H0001894

ポット
メキシコ
にぎやかな模様と彩色が特徴のタラベラ焼きのポット。コーヒーや紅茶用のふだんづかいのもの。
H 22 x W 20 x D 26
H0156212

ミントティー用ポット
モロッコ
茶葉に加え、生のミントと砂糖を入れ、高いところからグラスに注ぐのが特徴。ふたの取っ手がミントの葉の形になっている。
H 22 x W 15 x D26
H0179991

コーヒーポット（置き台付き）
エチオピア
家庭で使用されている伝統的なコーヒーポット。豆をいり、臼でつき、土器で煮出して小さな茶わんにいれて飲む。
H 24 x W 14 x D 18
H0007158、H0007159

コーヒーポット
サウジアラビア
注ぎ口は開閉可能で、ナツメヤシの繊維を入れ、フィルターにする。
H 49 x W 24 x D 41
H0100202

ポット
インドネシア
スマトラ島に住むミナンカバウの人びとのあいだで使われていたポット。竹製の筒に木の取っ手が付いている。
H 30 x W 10 x D 20
H0166221

茶器
中国
ムスリム（イスラーム教徒）である回族のもの。側面に文様化されたアラビア文字でコーランの言葉が書かれている。
H 10 x W 11 x D 14
H0268132

みんぱくフォーラム2014
東アジア展示があたらしくなりました!!
朝鮮半島の文化・中国地域の文化・日本の文化「沖縄のくらし」「多みんぞくニホン」の展示場が新しくなって3月20日（木）にオープンしました！

■関連イベント

◆みんぱく映画会

「台湾映画鑑賞会――映画から台湾を知る」
台湾映画は、その質の高さと台湾社会を描き出す力に満ちあふれています。
映画上映の前には映画の内容に関する台湾社会や歴史経験に関する解説があります。

第1回「村と爆弾（原題：稲草人）」
日時　4月29日（火・祝）13時30分～16時（13時開場）

第2回「超級大国民（原題：超級大國民）」
日時　5月6日（火・振休）13時30分～16時30分（13時開場）
会場　本館講堂（定員450名）
※申込不要、参加無料（要展示観覧券）
※当日10時から講堂入口にて整理券を配布

◆展示場クイズ「みんぱQ」
中国地域の文化編
期間　4月24日（木）～5月27日（火）

企画展
「みんぱくおもちゃ博覧会――大阪府指定有形民俗文化財『時代玩具コレクション』」
会期　5月15日（木）～8月5日（火）
本コレクションは、昭和50年代から収集されたものであり、江戸時代以降のニホンの玩具史の全容を知ることができます。

みんぱくワールドシネマ
「マイネーム・イズ・ハーン」
9・11テロ直後のアメリカにおけるイスラム教徒の葛藤と勇気を描いた作品を通して異文化に生きる人びとについて考えます。
日時　5月31日（土）13時～16時30分（12時30分開場）
会場　本館講堂（定員450名）
※申込不要、参加無料（要展示観覧券）
※当日10時から講堂入口にて整理券を配布

みんぱくミュージアムパートナーズ
点字体験ワークショップ
日時　4月12日（土）12時～15時30分
　　5月10日（土）12時～15時30分
会場　本館エントランスホール
※当日随時受付、参加無料

みんぱく春の遠足・校外学習　事前見学&ガイダンス
春の遠足・校外学習にむけて事前見学に来館される学校団体の先生方を対象としたガイダンスを開催します。新しくなった展示についても研究者が展示場で説明します。
実施日　4月3日（木）、4日（金）
時間　14時～17時
会場　本館第5セミナー室ほか
参加申込方法
本館ホームページから参加申込書をダウンロードし、必要事項を記入の上、FAXにてお送りください。
お問い合わせ先
広報企画室　広報係
電話　06・6878・8560

みんぱく創設40周年記念　カレッジシアター
「映像で見る、みんぱく研究者が語る喜味家たまごの地球探究紀行」
研究者が撮影した世界各地の記録映像と研究者によるレクチャーであなたの知らない世界を体感しませんか。「三味線放談」の喜味家たまごさんとのフリートークもお楽しみください。
近鉄百貨店ならではの美味しいお弁当付き。
日時　毎週水曜日　月3回　11時～13時30分
場所　あべのハルカス近鉄本館ウイング館9階「SPACE9」
主催　産経新聞社
特別協力　国立民族学博物館、千里文化財団
※要事前申込（申込締切は各回開催日の1週間前）、参加費4940円（税込み）
お申し込み・お問い合わせ先
電話　06・6633・9087
ウェーブ産経大阪カレッジシアター係まで。
詳しくは、産経新聞のホームページをご覧ください。
https//www.esankei.com/minpaku

第1回　4月9日（水）
講師　寺田吉孝（本館 教授）
演じる音――チャルメラの響きに人が集う

第2回　4月16日（水）
講師　三尾稔（本館 准教授）
インドの大地に春を呼ぶ――ホーリーの火祭り

第3回　4月23日（水）
講師　川瀬慈（本館 助教）
唄をなりわいに生きる人びと――エチオピアの楽師アズマリ

なお、みんぱくフリーバス、国立民族学博物館友の会会員証、キャンパスメンバーズの学生証等をお持ちの方は、ご提示いただくと、観覧券は不要です。

●無料観覧日のお知らせ
5月5日（月・祝）のこどもの日は、本館展示を無料で観覧いただけます。ただし自然文化園を通行される場合は、入園料が必要です。
※各イベントについてくわしくはホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時から17時（土日祝を除く）です。

●研究公演、映画会等参加方法変更のお知らせ
4月から、研究公演、みんぱく映画会、みんぱくワールドシネマにご参加いただく際、当館の観覧券のご提示をお願いすることといたしました。観覧券は、当館観覧券売場または自然文化園各ゲート脇の券売機等にてお買い求めください。

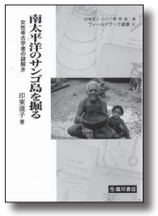
●みんぱくミュージアムパートナーズ（MMP）新規メンバー募集
みんぱくミュージアムパートナーズは、観覧者にみんぱくをより楽しんでもらうために自主的な企画を運営する市民パートナーです。現在9月から活動する新しい仲間を募集中です。
応募期間　5月10日（土）まで（30名）
お問い合わせ先
みんぱくミュージアムパートナーズ事務局
平成26年度新規募集係（本館社会連携室内）
Email　mmp-jimukyoku@idc.minpaku.ac.jp

刊行物紹介

■関雄二　著
『アンデスの文化遺産を活かす――考古学者と盗掘者の対話（フィールドワーク選書）』

臨川書店　2,000円（税抜）
遺跡をめぐる破壊と対立を乗り越えた先にあるものとは!？現地の人びとの多様な価値観や歴史観に触れながら文化遺産を継承する意味を考え、実践します。

■印東道子　著
『南太平洋のサンゴ島を掘る――女性考古学者の謎解き（フィールドワーク選書）』



臨川書店　2,000円（税抜）
小さなサンゴ島で人はどうやって生活してきたのか？多くの新発見から見えてきたサンゴ島で暮らす工夫とは？発掘調査とそれに続く分析研究を臨場感豊かに描きます。

みんぱくゼミナール

会場　本館講堂（定員450名）
時間　13時30分～15時（13時開場）
定員　450名（当日先着順）
参加費　無料（展示をご覧になる方は観覧料が必要です）

東南アジア華僑が故郷の家族に宛てた手紙

第431回　4月19日（土）
世界の華僑・華人と〝故郷〟
講師　陳天璽（早稲田大学 准教授・本館 特別客員教員）
中国国外に居住する中国系は華僑・華人と呼ばれており、4000万人以上いるとみられています。世界に根を下ろしながらも中国の伝統文化を守り続けている人びともいれば、異民族との通婚や世代交代により独特な複合文化を形成している人びともいます。そんな彼らの多彩な日常生活から、〝故郷〟とのかかわりについてみていきます。

人種差別デモに対して催された反差別デモ（2013年大阪　藤井幸之介撮影）

第432回　5月17日（土）
多みんぞくニホンのいま――特別展から10年
講師　庄司博史（国立民族学博物館 教授）
2004年3月特別展「多みんぞくニホン」がみんぱくで開催されました。外国人の急増により単一民族社会といわれた日本の大きな変化を予兆する展示でした。10年後の今年3月本館展示に「多みんぞくニホン」のコーナーが設けられました。この間、経済不況、東日本大震災など多くの試練をへて日本は外国人にとってどのように変化したのでしょうか。

みんぱくウィークエンド・サロン
研究者と話そう

時間　14時30分～15時30分
要展示観覧券
※都合により、予定を変更することがあります。
国立民族学博物館の研究者が来館された皆様の前に登場します！「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。どんどん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

4月6日（日）
話者　伊藤悟（国立民族学博物館 外来研究員）
話題　徳宏タイ族の音文化――音で対話する楽器と織機
会場　本館展示場（ナビひろば）

4月13日（日）
話者　庄司博史（国立民族学博物館 教授）
話題　外国人集住地域って？
会場　日本の文化展示「多みんぞくニホン」セクション

4月20日（日）
話者　野林厚志（国立民族学博物館 教授）
話題　台湾原住民族の工芸文化――むかし、今、そして未来
会場　本館展示場（ナビひろば）

4月27日（日）
話者　八杉佳穂（国立民族学博物館 教授）
話題　マヤ文字で名前を書いてみよう
会場　本館展示場（ナビひろば）

国立民族学博物館創設40周年記念　日本文化人類学会50周年記念
「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにざぐる」
迫りくる力、驚きとの出会い、このアートを体験しよう
会期　6月9日（月）まで
会場　国立新美術館　企画展示室2E（東京）
詳しくは、国立新美術館のホームページをご覧ください。
http://www.nact.jp/

＊

「渋沢敬三記念事業　屋根裏部屋の博物館――Attic Museum」
会期　5月6日（火・振休）まで
会場　埼玉県立歴史と民俗の博物館

友の会

国立民族学博物館友の会　電話 06-6877-8893（平日9時～17時）　FAX 06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　　e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会（大阪）
会場　国立民族学博物館　第5セミナー室
定員　96名（当日先着順、会員証提示）

第431回　5月3日（土）14時～15時
【新 中国地域の文化展示関連】
漢族はなぜ家族を大切にするのか
講師　韓敏（国立民族学博物館 教授）
今回の展示には婚礼グッズ、位牌、家系図（族譜）などがあらたに加わります。これらは漢族のくらしに欠かせない大切なものですが、どのように用いられているのでしょうか。たとえば族譜は定期的に記録が見直され、名前以外にもさまざまなことが記載されます。ここからどのようなことが読み取れるのでしょうか。近年の社会事情の変化にも注目しながら、漢族にとっての祖先祭祀と個々の命のつながりについて考えてみます。

第432回　6月7日（土）14時～15時
【新 日本の文化展示関連】
多みんぞくの街・新大久保とハラールフード産業
講師　菅瀬晶子（国立民族学博物館 助教）
日本有数の多みんぞくの街、東京都新宿区の新大久保。韓流の街と思われがちですが、じつは多種多様な移民が混住しています。本講演では、新大久保が多みんぞくの街となった歴史を振り返るとともに、近年もっとも活気のある「イスラーム通り」に注目します。イスラームの教えに沿った食べ物であるハラールフード産業は、この街でいかにして花開いたのでしょうか。当日は、新大久保で売られているハラールフードのサンプルを、実際に手に取っていただくこともできます。
※ともに講演会終了後、講師をまじえ、1時間程度の懇談会をおこないます。こちらも是非ご参加ください。

引き続き7月以降も、あたらしくなった東アジア展示に関連した講演会を予定しています。
7月は日本の文化展示より「沖縄のくらし」、8月は朝鮮半島の文化展示について、お話しいただきます。

BORDERLESS HERITAGE

文化遺産

おもてうら

無形文化遺産の謎
――ウラはあっても「おもてなし」

飯田卓（いいだ たく）
民博 先端人類科学研究部

大天守閣保存修理中の姫路城。城の線画が描かれた素屋根に覆われている。1993年世界遺産に登録（2013年6月撮影）

文化遺産のわかりにくさ

これまで誰も見向きもしなかったようなものでも、「文化遺産」とよぶだけで、マスメディアがこぞって話題にとりあげるようになった。わたしは、それを喜ばしいと思う者だ。あたり前のように存在すると思っていたことがらの価値を、あらためて考えなおす機会が増えたと思うからだ。

文化遺産ブームにさきがけて知られるようになったユネスコの世界遺産は、もともと、そんな「いい加減な」ものではなかった。世界遺産は、専門家集団が厳密に審査し、顕著な普遍的価値を証明したもので、その称号は一流だ。その世界遺産のカテゴリーのひとつに、文化遺産がある。文化遺産という語は、国際機関お墨つきという高貴なオーラを帯びながら、「うけ継いでいくべきもの」という単純素朴な意味ももっている。こうした二面性が、文化遺産ブームのひき金になったのだと、わたしはみている。

だが、こうした二面性は、まちがいなく、文化遺産をわかりにくいものにしている。多くの場合、知名度の低いことがらを「○○遺産」と名づけ、世界遺産なみの知名度にひきあげる狙いがあるからだ。知名度の低さを「ウラ」に隠して、万人が目を向ける「おもての顔」を創作しようというのが、マスメディアをまきこんだ文化遺産ブームの本質だ。このことは、B級グルメブームについてもいえる。

富士山は、2013年に「富士山――信仰の対象と芸術の源泉」という名称で世界文化遺産に登録された

普遍的な価値

世界遺産のように公認されたものと、現時点でマイナーなものとが一緒くたに文化遺産とよばれるため、事情をよく知らない人は、しばしば戸惑ってしまう。とりわけややこしいのが、昨年に和食を仲間入りさせた「無形文化遺産」というやつだ。これは、ユネスコの国際条約にもとづいて、批准国の代表が審査して与えた称号で、世界遺産と同じくらいの重みをもつ。世界遺産は、建造物や自然景観など、かたちのあるものが対象であるのに対し、無形文化遺産は、芸能や儀礼、知識、習慣など、かたちのないものが対象だ。だが、もうひとつ、世界遺産と無形文化遺産の決定的なちがいがある。

2013年に無形文化遺産に登録された「和食」。一汁三菜はその特徴のひとつ

世界遺産は「顕著な普遍的価値」、つまり、誰もがすごいと認められるような性格をもつことを条件とする。そして、登録審査の過程でも、この条件にかなうかどうかが真剣に討議される。これに対して無形文化遺産の場合、申請国が書類を出してしまえば、あとはその価値の高さや妥当性が議論されることはない。極端にいえば、一家族の習慣や一企業の行事であっても、日本代表の事務局にねじ込んで納得させれば、国際会議にかけて無形文化遺産の称号を得ることができる。

かたちないものへのまなざし

無形文化遺産のこうした不思議な性格は、世界遺産の制度に対する反省から生まれたといわれる。世界遺産に登録された案件（とくに文化遺産）を一覧すると、明らかにヨーロッパのものが多く、アフリカやオセアニアのものが少ない。人口比から考えると、アジアのものも少ない。文字記録の流通範囲や、異文化に接する頻度など、いろいろな歴史的要因のちがいが、価値審査の結果のちがいにあらわれたのだろう。建築に関していえば、ヨーロッパではしばしば石を素材とするため、永く残りやすく、他の地域では、朽ちやすい素材を新陳代謝させながら維持しているというちがいもある（たとえば、伊勢神宮の式年遷宮）。いずれにせよ、世界文化遺産の登録数だけをみて、ヨーロッパ文化が抜きんでて高いということはできない。他の地域の文化遺産も、もっと別のかたちで評価されてよい。そうした経緯から、普遍的価値に拘泥しない無形文化遺産の制度ができたという。

マダガスカルの民族、ザフィマニリの木彫知識。2003年に初期登録され、現在は無形文化遺産

価値を認められていない状態から出発しても、ユネスコに認められたとたんに、認知度が高まってその価値は倍増する。こうした無形文化遺産を理解するには、その遺産がたどってきた歴史を詳しく見てみればよい。この新コーナーでは、そのような個別事例の紹介をとおして、文化遺産全般についても理解していただこうと計画している。次号も乞うご期待。

多文化をあきなう

「インカのいのち」を世界に

大橋則久（おおはし のりひさ）
特定非営利活動法人アルコイリス代表理事

樹木と農産物を同じ場所で同時に栽培する、アグロフォレストリー。その森で育ったインカインチの実からとれるオイルで、生産者、消費者両方の、いのちと生活の質を変えようとするアルコイリスの活動と理念を紹介する。

ペルーアマゾンの恵み

インカインチは、南米ペルーのアマゾン熱帯雨林に分布するトウダイグサ科の蔓性（つるせい）常緑樹の実で、ペルーではサチャインチともよばれている。インチとは、先住民のことばで命を意味するため、インカインチとは、インカのいのちという意味になる。

この実の油を搾った「インカインチオイル」が世界市場に出るきっかけとなったのは、二〇〇四年六月、食の都パリで開催された国際食用油コンクール「パリ・ウォルル食用油サロン」だった。オリーブオイルを除く植物油部門で、アルガンオイルやヘーゼルナッツオイルなど他の油を抑え金賞を獲得した。日本市場では二〇〇六年一月に販売を開始。日本脂質栄養学会や食品化学工業学会ではその安全性や機能性を裏付ける論文が発表され、女性誌や生活提案誌、テレビの情報番組などのマスメディアが、「体に良い油」や「美容に役立つ油」としてその魅力を紹介する機会が増えた。それに伴い商品の知名度は徐々に上昇し、有名百貨店や高級スーパーのグロッサリー売り場では、定番商品としてのポジションを確保しつつある。

現在フェアトレードといえば、コーヒー、紅茶、チョコレート、オーガニックコットンなどが馴染（なじ）み深いが、ペルーアマゾン原産の「インカインチオイル」もフェアトレードの理念に基づいて生産されていることはほとんど知られていない。その理由のひとつには、インカインチが同じ熱帯の産品でありながら、バナナやカカオや油椰子（あぶらやし）などの伝統的輸出産品とは異なり、新規作物であるが故にフェアトレード認証の対象となっていないことがある。

起源は先スペイン時代

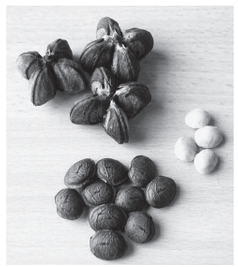
インカインチの利用の起源は古く、一六世紀にスペイン人が到来する以前から、インカインチのさやを模（かたど）った星形の土器が作られており、当時から人びとの暮らしに役立てられていたことが伺われる。アマゾンの先住民による伝統的利用法としては、ナッツをローストしてそのまま食べる他、スープ、調味料、トウモロコシの蒸し物の具材や、若葉のサラダ、焼きバナナサンドなど個性豊かな郷土料理の食材としても利用されている。またオイル単体やオイルと搾り粕（かす）を混ぜ合わせたクリームを直接肌に塗布することもあり、筋肉痛やリューマチの治療、肌の若返りや細胞の活性化などの美容効果があると考えられている。

このインカインチの製品化に取り組んだのは、発明家でありナチュラリストでもあるペルー人のホセ・アナヤ博士と、ペルー国立サンマルティン大学の生物学者セサル・ヴァジェス教授である。インカインチの栄養価値は、絶妙なバランスで構成される必須脂肪酸（オメガ3とオメガ6）と、アミノ酸が豊富で消化吸収性に優れた良質なタンパク質を多く含む点にあることから、インカインチの産業を興すことは、ペルー国内だけでなく、世界の人びとの食生活に重要な価値を提供することになるとの認識が創業者たちを突き動かしてきた。

生産者の生活の質を高める試み

「ペルーのNGO・企業・大学と連携し、貿易の促進を基本とした相互交流による、持続可能な熱帯雨林開発の実証」をミッションとして掲げるわたしたち特定非営利活動法人アルコイリスは、二〇〇五年からホセ・アナヤ博士らのプロジェクトに参加し、インカインチの開発を分担している。インカインチの開発はその歴史が浅いだけに課題が多く、農業生産、加工生産、研究開発、市場開発と広範囲に渡り、常に持続可能な生産の確立と普及を強く意識している。そのため、農業生産ではアグロフォレストリーシステムや有機栽培などエコロジカルな方法による適正技術を、加工生産では高品質なオイルの生産を重視し、それぞれの目的の達成を生産地の生態系や多様性を大切にしながら目指している。

二〇〇八年から開始した国際協力機構の草の根技術協力事業では、ウカヤリ州プカルパ市周辺のアグロフォレストリー生産者コミュニティーを支援している。インカインチの加工工程においては、大量生産を目的とした産業用搾油機の代わりに、オペレーションにあたり電気を必要としない「玉絞り式手動搾油機」を畑に隣接した村の共同作業場に導入し、新鮮な原料をより低い温度で加工することで、経済的付加価値の高い「プレミアムオイル」の製造に取り組んでいる。このプロジェクトではペルー国立ウカヤリ大学との協定に基づき、インカインチから油を搾った後の「トルタ」とよばれるおから状の高タンパク原料を食材として有効活用し、地域の子どもたちの栄養改善に役立つ料理レシピの開発や、学校での料理教室・栄養セミナーなどの普及活動も実施している。今後、玉絞り手動搾油技術を核とする「マイクロビジネス」をアグロフォレストリー生産農家が安定的に実践できるようになれば、原料販売に依存せざるをえないこれまでの状況と比較し、生産者のえるメリットは大きい。収入増により生計が改善されるだけでなく、トルタの地産地消による子どもたちのタンパク質不足の改善と、アグロフォレストリーによる持続的農業開発と合わせ、生産地域の生活環境レベルが総合的に高まることが期待される。



インカインチの種実（上）
インカインチオイル（下）

ナッツをすりつぶす道具「バタン」

インカインチナッツ

農業技術指導する
アルコイリスのスタッフ

ホセ・アナヤ博士

インカインチ焼きバナナサンド

味の根っこ

アラブの豆コロッケ

ファラーフェル（前編）

菅瀬 晶子（すがせ あきこ）　民博 研究戦略センター

パレスチナのファラーフェル。ヒヨコマメだけで作るので、割ると中身は黄色い。エルサレム旧市街にて撮影

働く母親の遅い昼食

ワーキングマザーのサミーラが仕事を終え、職場近くの実家に向かうのは、いつも午後二時半を回ったころである。そこで学校帰りの子どもたちと待ち合わせて帰宅し、昼食をとる。朝はコーヒーしか飲まず、仕事の合間にクリームチーズを挟んだパンをかじるだけの彼女にとって、遅い昼食がその日最初のまともな食事だ。

「ロールキャベツを作りたかったけど、とても無理。今日のお昼はファラーフェルにするわ」

口の端をゆがめたのは、弁解じみた口調になってしまったのを悔いたせいだろう。女性は結婚後、主婦になるのが当然だった時代から、サミーラのように共働きで家計を支える時代に移行しても、アラブの母親がまず第一に考えることは、子どもに手料理をお腹いっぱい食べさせること。市場で出来合いのファラーフェル・サンドウィッチを買ってきて食べさせるなど、あまり外聞のいいことではないのだ。近所の口うるさい老女たちに知られたら、なにを言いふらされるかわからない。

「でも、ファラーフェルならいいと思うの。ハンバーガーやピザを食べさせるよりも、ずっとね」

「そうだね。でもあそこのお店、油は大丈夫？古いの使ってない？」

「大丈夫、この前もこの子と食べたし。今日はわたしたちもアキコと同じ、ベジタリアンね！」

うろちょろする末の息子をつかまえて、ようやくサミーラは疲れた顔に笑みを浮かべた。末の息子は好き嫌いがひどく、彼女はずっと悩んでいる。それでもファラーフェルだけは好きで、よく食べるのだそうだ。休日、余裕があるときは、彼女も家でファラーフェルを作る。肉の好きな夫には不評で文句を言われるが、食事は子ども中心に考えなくちゃという彼女にわたしは賛成だ。

「母さん、お腹すいたよ！」

「ちょっと待ってなさい、これからファラーフェル買いに行くから」

「やった、ファラーフェル！」

後部座席で飛び跳ねはじめた息子をなだめつつ、サミーラは車をUターンさせて、運転席から手を振る。ようやく食事にありつけるとあって、心なしか疲労の色も薄らいだようだ。

食堂で出てきたファラーフェルとホンモス（ヒヨコマメのディップ、左）。エルサレム旧市街にて撮影

ストリート・フードの王様

ファラーフェル。シリアをはじめとした東地中海のアラビア語圏諸国を旅したことのある人ならば、この食べ物になにがしかの思い出が必ずあるはずだ。パレスチナをおもな調査地とするわたしにとっても、ファラーフェルははじめて食べたアラブの食べ物であり、今でも調査中、必ず一度は口にする。

ひと晩水に浸してすりつぶしたヒヨコマメを、パセリやタマネギと混ぜて揚げただけのこの食べ物は、いわば豆コロッケ。名前の由来は、アクセントにきかせたトウガラシ（アラビア語でフィルフィル）からきているというが、豆をあらわすコプト語由来という説もあり、じつははっきりしない。コプト語は、イスラームによってアラビア語がもたらされる以前のエジプトの言語なので、この説が正しいとすれば、ファラーフェルも非常に古い歴史のある食べ物ということになる。コプト教徒を含む中東のキリスト教徒たちは、斎とよばれる一定期間の菜食をおこなうが、彼らの斎の食卓にもファラーフェルはしばしば登場する。

食べ方はシンプルそのもので、そのまま前菜としてつまむか、サンドウィッチの具にするか、どちらかだ。シリアやレバノン、パレスチナなど、東地中海アラビア語圏には、たいていどの街にもファラーフェル専門の屋台や大衆食堂があり、朝から賑（にぎ）わっている。これから仕事に出かける労働者やビジネスマン、市場に買い物に来た中年女性、学校帰りの学生たち、それに外国人観光客。客の顔ぶれもさまざまで、揚げたてのファラーフェルをはさんだサンドウィッチに、誰もが幸せそうにかぶりつく。安くて早くて栄養満点、ファラーフェルこそはアラブのストリート・フードの王様にして、ソウル・フードの代表なのだ。

もっとも、ストリート・フードという印象があまりに強いためか、先にも述べたように、ファラーフェルを食べるというのはあまり外聞のよい話ではない。子どもの買い食いや主婦の手抜き、そんな印象がついて回る。しかし、ファラーフェルは家で作ると結構手間がかかるのだ。現在はフードプロセッサーが普及して、ヒヨコマメをすりつぶすのも機械任せにできるようになったが、昔は主婦の苦労はいかばかりであったろう。揚げ物の後始末が面倒であるのも、いうまでもない。もとは手間がかかるおふくろの味だからこそ、ファラーフェルはソウル・フードたりえるのである。

ヨルダン川西岸地区、ベツレヘムのファラーフェル・スタンド。観光客のみならず、いつも地元民でいっぱいの人気店だ

パレスチナのファラーフェル（falafel）の作り方（約 20 個分）

- ヒヨコマメ　2 カップ
- パセリ　一束
- タマネギ　大 3 個
- ニンニク　ひとかたまり
- トウガラシ、クミン、コリアンダー　各小さじ 1
- 塩　小さじ 2
- 重曹　小さじ 1
- 食用油

①ヒヨコマメを重曹を溶かした水にひと晩つける。

②ヒヨコマメの水をきり、みじん切りにしたタマネギ、パセリ、ニンニク、スパイス類と塩と一緒にフードプロセッサーにかける。これがファラーフェルのタネとなる。

③スプーンなどでファラーフェルのタネを丸め、中火で熱した食用油で揚げる。

④ こんがりと揚げ色がついたら、油をよく切ってできあがり。そのままいただいてもよし、サンドウィッチの具にしてもよし。

※そのままでもおいしいですが、練りごまを水とレモン汁でといたソースや、チリソースが合います。

もろびと こぞりて

人間学のキーワード

文化遺産
Cultural Heritage

飯田卓（いいだ たく） 民博 先端人類科学研究部

未来へむけてうけ継いでいくべきもの、かけがえのないものというニュアンスを帯びながら、見かたによっては、これほど胡散（うさん）くさい用語も少ない。それというのも、誰も継承しようとしないつまらないものであっても、誰かが「うけ継いでいかなければならない！」と宣言したとたん、それは、文化遺産としての第一歩を踏みだすからだ。

日本でこの語が普及しだしたのは、世界遺産の考えかたが普及した一九九〇年ごろではなかろうか。それまでは、文化遺産にもっとも近い内容をあらわすものとして「文化財」がつかわれていた。これは、「文化遺産」ほど、高貴な含みを帯びていない。高貴な文化財に対しては、「国宝」や「重要文化財」など、文化庁が与えたタイトルがある。

ところが「文化遺産」は、文化財と同じく一般名詞でありながら、重要文化財に似たお墨つきのタイトルとしても通用する。これはひとえに、世界遺産というユネスコの制度とかかわって、この語が広まったことが関連していよう。世界遺産はご承知のとおり、文化遺産と自然遺産、そして、両者の性格を併せもつ複合遺産の三つにわかれている。世界遺産の種類に文化遺産というカテゴリーがあるおかげで、ユネスコが関知しない文化遺産でも、なんとなく、ユネスコの世界文化遺産に比肩しているような印象を与えることになってしまった。

このことを利用して、知名度の低い文化財や伝統が、こぞって文化遺産を名乗るようになった。「〇〇遺産」と名のつくもののリストを一覧すれば、そのことは明らかだ。「勝手に関西遺産」（朝日新聞）などは、地域色が強く支持層に偏りがあることがらを意識的にとりあげて、支持者の裾野を広げようとする。そのほか、地域振興の一環として構想された「〇〇遺産」も多い。

また、意外にたくさんあるのが、産業技術関係の遺産である。近代化産業遺産（経済産業省）、近代土木遺産（国土交通省）、土木遺産（土木学会）、情報処理技術遺産（情報処理学会）、機械遺産（日本機械学会）、トライポロジー遺産（日本トライポロジー学会）、航空遺産（日本航空協会）など、各種団体が創設したものも多い。古来よりうけ継がれてきたことがらだけでなく、歴史の浅いことがらもまた貴重なことを、関係者が懸命に示そうとしているのがわかる。

このように、関係者が文化遺産と名指してしまえば文化遺産として通用してしまうような自由闊達（かったつ）さは、文化遺産の魅力である。伝統がなくても、愛好者が少数でも、大切だと思えばすぐに「文化遺産」と名づけて、普及運動を始められる。こうしたよい意味での文化的アナーキズムは、いま、空前の活気を帯びているのではないか。

民博では二〇一三年度より、「文化遺産の人類学」という機関研究を立ちあげた。それが着目しようとするのは、文化遺産をめぐって活発化しつつある、人びとの動きである。文化遺産もおもしろいが、それにかかわる人たちは、もっとおもしろい。

異聞逸聞

森の僧から学ぶこと

岡部 真由美（おかべ まゆみ）　中京大学准教授

僧侶と禁欲のイメージ

「タイの僧侶って肉を食べないのでしょう?」。日本で、わたしがタイの僧侶について研究していますと言うと、かなりの割合で返ってくるのがこの一言だ。たしかに、スリランカを経由し、東南アジア大陸部に広まった上座部仏教の伝統には、菜食を貫き、瞑想（めいそう）を続けながら森のなかで修行する、森林僧の系譜がある。しかしこれは全体からみれば少数派である。大多数の僧侶は厳格に戒律を守るものの、村の近くの寺に居住し、村人たちの日々の暮らしと密接に結びついた社会的役割を担っている。それでもなおわたしたちは、上座部仏教の僧侶に対してどこか禁欲のイメージを抱きがちなのである。

森のなかでの出会い

タイ北部最大の都市チェンマイ周辺の山々は、深い森に覆われている。この森はかつてより、森林僧にとって絶好の修行の場であった。約一〇年前、調査のためにチェンマイ市街地に滞在していたわたしは、時折、こうした森へ出かける機会に恵まれた。すると森のなかで、偶然その場をとおりかかる森林僧たちに出会うことも珍しくはなかった。遠く離れたタイ中部や東北部、さらにはラオスやミャンマーからもやって来る彼らは、陽に焼けた身体に、薄汚れた黄衣を纏（まと）い、最低限の生活品だけを携えて、道なき森をひたすら歩く。その姿は、俗世を捨てて修行に勤（いそし）む僧侶の理想像そのものに見えたものである。

修行の合間に電話で話す相手は誰でしょう?

一本の電話

「山を下りて街へ出てきたよ。会いに来てくれるかい?」。市街地での日常に戻っていたわたしのもとに、不意にこんな電話がかかってくることがあった。番号は見知らぬ携帯電話か公衆電話。相手が誰なのか見当もつかぬまま耳を傾けていると、次第に記憶が蘇（よみがえ）ってくる。声の主は何か月も前に森のなかで出会った森林僧だった。本のなかでしか知りえなかった森林僧に出会ったときのわたしは、その喜びから目をキラキラさせていたのだろうか。邪念を抱かせ、修行の邪魔をしてしまったのかもしれない。落胆すると同時に反省もさせられた。とはいえ、こうした電話は何より、森林僧と禁欲のイメージを安易に結びつけることの危うさをわたしたちに教えてくれるのである。

制服の世界
THE UNIVERSE OF UNIFORMS
世界の制服

北欧型福祉国家のケアワーク

高橋（たかはし）絵里香（えりか）　千葉大学准教授

冬には一対の青いビニール袋。かつてフィンランドの在宅訪問ケアワーカーにとって、おそろいの道具はこれに限られていた。しかし、最近ケアワーカーの制服が普及した。たしかに、制服はその人の社会的役割を表示してくれるから便利であり、ケアワークの効率化の一環で生じた変化なのだが……。

訪問先でシャワーの介助をおこなうためのスタイル。これも制服の一種？

青いビニール袋の合理性

フィンランドのケアワーカーにとって、袋状の青いビニールこそ冬の制服だ。

それはかならずふたつ一組だ。二〇〇四年の一月、わたしが初めてホームサービス（日本におけるホームヘルプ）の夕方シフトに同行した際にも手渡された。ラフなジーンズにセーター姿のケアワーカーさんが、それを自分が履いている靴にかぶせながら説明してくれた。

「靴を脱いでいる時間がないから、これを使うの」

青いビニール袋は土足で室内に上がり込むための靴カバーだったのである。

冬のフィンランドでは凍りついた道を歩くためにごついスノーブーツを履く人が多いが、編み上げ紐は着脱が面倒だ。しかも、夜間のホームサービスは一軒の滞在時間が約五分と短い。つまり、高齢者宅を訪問するたびに靴を脱ぐことが結構な手間になるのである。

ホームサービスの訪問時間が短いのは、それなりの理由がある。夕方シフトのケアワーカーたちは、独居生活を続けるお年寄りたちに夕方の薬を渡しに行くのだ。

フィンランドでは、多くのお年寄りが独居生活を送っている。社会保障の予算が膨れ上がる昨今、費用のかかる施設介護ではなく在宅介護が施策として推進されているため、自立生活を送るのが難しいような状態にある人びとが、ホームサービスの支えによって何とか独居を続けているのである。

認知症を抱えており、自分で規則正しい服薬ができない人に対しては、ケアワーカーが一日に三回薬を届けることとなる。午前中や午後の訪問はお喋（しゃべ）りの相手をする余裕もあるのだが、夕方シフトは訪問先の数も多く、薬を渡すだけで辞去する場合が多い。

靴カバーは、こうした北欧型福祉国家を支えるケアワークの性質を象徴している。

ケアワーカーの自律性か、労働の効率か

初めてのホームサービス同行から数年が経過し、久々に馴染（なじ）みの自治体を訪れたわたしは、そこで大きな変化を目撃した。靴カバーに加えて、ケアワーカーたちが見慣れぬ制服を着ているのである。色も形もさまざまなトップスの胸元に、スウェーデン語とフィンランド語を公用語とする自治体らしく二言語で「〇〇町ホームケア」と書いてある。

同時期に、町の在宅介護制度は大きな変化を経験した。一番大きいのは、スマートフォンによる労働時間の登録システムが導入されたことだろう。ケアワーカーたちは、お年寄りの家を訪問するたびに玄関先のバーコードをスマートフォンで読みとり、業務内容を事細かに記録することが義務づけられた。

こうした改革はケアワークの効率化を図るという意味では有効だった。過去のサービス履歴をスマートフォンで簡単に確認することができるようになったし、制服によって町のスタッフを視認しやすくなった。だが同時に、ケアワークの規則を増やし、労働内容を形式化していこうとする動きでもある。それは町の社会保障予算を削減していこうとする努力の一環であり、ケアワーカーたちの自律性を制限しようとするものでもあるのだ。

ただし、ケアワーカーたちの制服は色も形もまちまちであり、徹底的な統一化が図られたとは言い難い状態にある。なんでも各人がカタログから気にいったデザインを選んだそうで、ネームタグ以外に統一基準はないらしい。制服を着なくてはいけないというルールもなく、気が向いたときにだけ着ているのだそうだ。

そうしたケアワーカーに許された自由裁量権は、彼らの仕事内容の自律性とも連動しているように思う。ケアワーカーたちは独居するお年寄りたちの生活をもっとも身近な場所で支える存在である。効率だけを信条として成立する仕事ではない。

ケアワーカーたちのてんでばらばらな制服が、これ以上統一されなければ良いな、とわたしはひそかに願っている。

靴カバーをかぶせた筆者の足

ホームサービスの訪問先で、スマートフォンを使ってバーコードを読みとるケアワーカー

色も形もさまざまな制服を着たケアワーカーたち

歩行補助具の助けを借りて、雪の残る道を歩くおばあさん

月刊みんぱく 2014 4月号

編集後記

「その男、世界遺産級」。姫路城までの道沿い、数メートルおきに、こう書かれたのぼりがはためいていた。現在放映中のテレビドラマの主人公である姫路ゆかりの武将が、ユネスコ世界遺産に登録された姫路城に劣らない偉大な存在であることを主張する姫路市の宣伝文句らしい。「世界遺産」のラベルの恩恵に、地元のみならず放送局もがあやかろうとする「魂胆」がみえみえである。こうした文化遺産ブームに際して起きているさまざまな社会現象に注目したのが、新しく始まった「文化遺産おもてうら」のコーナーである。

本号の特集に見るように、過去の遺産を掘り出す発掘の周辺にも、今を生きる人間の「魂胆」が渦巻く。地元は雇用や観光収入に期待をするし、美術品として価値の高い出土品は盗人が狙う。親族間の遺産相続は骨肉相食む争いになりかねないが、発掘された文化遺産をめぐっても複雑な利害関係が生まれる危険性があるのである。考古学者は考現学者でもなければならない。

「和食」がユネスコ無形文化遺産に登録されたように、食文化もまた文化遺産になり得る。特定の料理が民族や国、宗教の境を越えて広く愛される場合もあれば、味の「所有権」をめぐって対立が起こる場合もある。食の伝播と帰属意識の関係を考えるのが、もう一つの新コーナー「味の根っこ」である。レシピ付きなので、ぜひお試しあれ。

（山中由里子）

●表紙：モライ遺跡。ペルー南高地、クスコ県
高低差を利用した農業実験場といわれている。撮影・関雄二

次号の予告

特集

中国地域の文化

――その多様性と伝統の展開

※みんぱくウィークエンド・サロンの情報は、13ページに移りました。

みんぱくをもっと楽しみたい人のために――会員制度のご案内

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます（特別展示は観覧料割引）。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

国立民族学博物館キャンパスメンバーズ

みんぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。

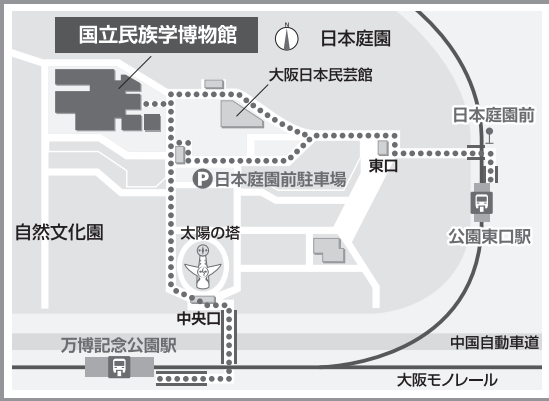
詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06−6877−8893／平日9：00～17：00）

月刊みんぱく 2014年4月号
第38巻第4号通巻第439号　2014年4月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話　06-6876-2151

発行人　池谷和信
編集委員　山中由里子（編集長）　樫永真佐夫　庄司博史　菅瀬晶子　丹羽典生　野林厚志　丸川雄三
編集アドバイザー　山内直樹
デザイン　宮谷一款
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　日本写真印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分。
●乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック
http://www.facebook.com/MINPAKU.official/
みんぱくツイッター
http://twitter.com/MINPAKUofficial

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

国立民族学博物館
ミュージアム・ショップ

お問い合わせ　FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp　水曜日定休
オンラインショップ　「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

『月刊みんぱく』など、みんぱくの刊行物のお求めは、ミュージアム・ショップまで

「イメージの力」展関連グッズ

東京の国立新美術館で開催中の「イメージの力」展関連グッズとして、展示カタログをはじめとした、展示資料の写真をあしらったTシャツ、エコバッグ、クリアファイルが登場です。
展示カタログには、約600点の展示資料のなかからセレクトした184点のカラー写真と解説、展示のコンセプトにまつわるエッセイが収録されています（Ａ４変型判272頁、上製本、税込価格2,480円）。
展示会の余韻を味わうだけでなく、今年の9月からはみんぱくでも開催されますので、その予習にもお役立て下さい。

Ｔシャツ	2,800 円
エコバッグ	1,200 円
クリアファイル〈全3種類〉	334 円

※価格はすべて税抜価格